

## 週日の説教

金 大烈 神父 2011年5月10日(火)

《罪の意識に止まらないために -悔い改めにつながるように祈りましょう-》

今日の第一朗読(使徒言行録 7:51-8:1a)では、カトリック教会の最初の殉教者の物語が紹介されています。その方の名前はステファノです。熱心な心で、イエス様が十字架の上で祈られたのと同じ内容を祈って殉教されたことが書かれています。

ステファノの言葉は「主よ、この罪を彼らに負わせないでください。」です。イエス様が十字架の上で、「父よ、彼らをお赦しください。自分が何をしているのか知らないのです。」という同じ内容を祈っていました。

私たちは、罪を犯した時、間違えた時に罪意識に縛られ、罪を犯したことを意識します。では、罪意識というのはよいものなのでしょうか、悪いものなのでしょうか。必要なものなのでしょうか、必要でないものなのでしょうか。必要なものですね。しかし罪意識は、本当に成熟した考え方で理解しなければ、危険なものになる可能性も持っています。

罪を犯して罪意識に陥っている人のほとんどは、『暗い』です。そしていつも、隠そうとすることが見られます。人間であり、良心というものをもっている限り、罪を犯したら必ず罪意識を感じます。しかし、大切なのは罪意識を感じるかどうかではなくて、罪意識を感じてからどうするか、だと思えます。

罪意識を感じてからの反応は、二つに分けられます。一つは、先ほど申し上げたように、隠そう、逃げようとする反応です。しかし、それは何の役にも立たない反応です。もっと自分を責めてしまい、『光』に移る可能性を失ってしまいます。

では、罪意識を感じたらどうすればよいのでしょうか。カトリックの教えは、ただ一つです。罪意識を感じることに止まってしまわずに、そこから悔い改めにつなげることです。それが二つ目の反応です。

悔い改めというものは、頭では絶対にできません。胸で感じられる何かの業です。何十年間も信仰の生活をしているのに、「赦しの秘跡が苦手だ。」という方は、振り返ってみてください。そこには必ず問題があります。「なぜ、告解部屋に入っても強く打たれる体験が出来ないのか。」と置いていらっしゃる方は、告解部屋に座っている司祭の問題ではありません。そこで働いている聖霊の働きとも関係ありません。100パーセント、ご自分が正直な気持ちになっていないからです。罪意識を感じて、悔い改めにつながるためには、何よりも正直さが必要なのです。

たとえば告解部屋の話をしたのですが、申し上げたかったのは、「罪意識がそのまま止まってしまうと、その人は何も発展が得られない。」ということです。罪意識の感覚も鈍くなってしまいます。これは悪魔が私たちを誘う一つの武器なのですが、何回も繰り返してしてしまうと全然感じられなくな

ってしまうのです。敏感さを取り戻すためには、やはり悔い改めが必要です。その悔い改めも、神様の恵みによってのみ可能なのです。ですから、いつも耳を傾けながら生きなければならないことを意識しましょう。

ありがとうございました。